つながりを永遠に

～日本赤十字社が結んだ絆～

vol.3 全7回

姫路赤十字病院看護師 スワルティさん（42）
「健康と平和を祈っています」

スワルティさんのメッセージを動画でも公開中

取材時の様子を短編の動画にまとめました。右の２次元コードからアクセスしてください。

日本赤十字社による被災地支援が結んだ人と人との「つながり」を再確認する連載。今回は岩手県山田町で救護活動を行った姫路赤十字病院（姫路市）の看護師スワルティさん（42）です。

スマトラの恩を胸に救護志願

イスラム教女性が髪を隠す「ヒジャーブ」をまとい、病棟を忙しそうに駆け回る。「体調はどうですか？」「血圧はいいですね」。患者一人一人に笑顔で向き合い、日本語で声を掛けた。病床560、診療科33を誇る姫路赤十字病院。インドネシア・ジャワ島出身の看護師スワルティさんは2009年から同院に勤務し、現在は消化器・呼吸器外科に籍を置く。

日本とインドネシアとの経済連携協定に基づく「外国人看護師候補者受け入れ事業」で08年夏に来日。看護助手として働きながら試験勉強に励み、挑戦3回目の11年3月、日本の国家試験に合格した。問題を外国人には難解な漢字で読解する力が求められるため母国で看護師経験はあってもハードルは高く、候補者398人中、合格はわずか16人という難関だった。

志願して救護に入った避難所で、スワルティさんは寄り添うことを心掛けた＝2011年4月、岩手県山田町

病院が用意した合格報告の会見の席上、スワルティさんは予定にはない発言で周囲を驚かせる。「被災地に行かせてください」。3年の苦節が実った喜び以上に、半月前に起きた東日本大震災の惨状が頭から離れなかった。

04年12月、母国インドネシアでスマトラ沖地震が起き、津波で22万人以上が犠牲になった。当時は首都ジャカルタの病院に勤務。発災１週間後に救護に入った最大の被災地アチェは依然として至る所に遺体があり、生き残った人も水や食料に難儀していた。支援は海外から届いた。薬、毛布、テント、非常食…。日本の物資だった。

「あの時、インドネシアは日本に助けられました。今度は私が恩返しする番です」。涙の訴えは叶い11年4月末、スワルティさんは病院の救護班8人に帯同して岩手県山田町に入った。活動場所は約390人が肩を寄せ合う高校の体育館。一画に寝泊まりしながら3日間、診察の補助やエコノミークラス症候群を防ぐ体操の指導などを担った。

スワルティさんは日本語でメッセージを書いた画用紙も持参していた。日本で暮らす同胞も協力した寄せ書き。〈関西で働いているインドネシアの看護師〉〈ピカピカの未来すぐ来るので一緒に頑張ろう〉。名刺代わりに掲げ、打ち解ける一助にした。まだ看護師の免許状が届いておらず任務には制約があったが、それでも被災者の脇に座って話を聞き、手を握り背中をさすった。「日本で頑張っているあなたに負けないように、私も頑張らないと」。返ってきた言葉はいま、母国に家族を残して単身生活を送るスワルティさんを励ます。

あれから10年。スワルティさんはいまの胸の内をこう言葉にした。「10年前、岩手県山田町でお会いした皆さま、健康で平和に生活されていることを願っております。新型コロナウイルスの影響で大変なこともたくさんありますが、一緒に頑張りましょう。姫路から愛を送ります」。国籍や宗教の違いも、歳月や距離の隔たりも超えて、つながりは息づく。

名刺代わりとなった手製のメッセージボードを胸に、当時を振り返るスワルティさん。「コロナがなければ、皆さんに会いに行きたい」

企画・制作/河北新報社営業部